

『続金瓶梅』に見える「蓮女成仏公案」をめぐる

辻
リ
ン

一 はじめに

本稿においては、『続金瓶梅』第三八回に見える「花燈輻蓮女成仏公案」の宣卷（以下、便宜上『花燈輻蓮女成仏宝卷』と称する）について、その概略を紹介した上で、同説話の内容と系譜、作品にみえる宣卷の状況について考察を加える。その過程で、明末清初における物語宝卷の様相の一端を明らかにしようと考える。⁽¹⁾長編白話小説『続金瓶梅』に関する研究は各方面から多く検討されているが、その中に見える『花燈輻蓮女成仏宝卷』⁽²⁾について踏み込んだ論考は管見の限りでは、まだ見当たらない。その点で本稿は意味あるものになろうと考える。以下、本題に入っていく。

これまで中国では各地で抄本の蒐集に力が注がれ、その地名を冠した宝卷（例えば、河西宝卷、酒泉宝卷、靖江宝卷など）を整理、出版されてきた。また近年、華北地域の宝卷や呉方言地域の宝卷など地域を限定し、文献と現地調査の両面での研究も進められてきた。⁽³⁾しかし、宝卷の変遷史の視点から、特に明清時期の物語宝卷の様相とその変化

過程についての、具体的検証はまだ十分になされていないのが現状である。その一因として、明末清初に現存する物語宝卷のテキストが不十分であることが挙げられる。

宝卷の変遷史における時代区分は澤田瑞穂「宝卷の変遷」に詳しい論考があり、定説となっている。⁽⁴⁾ここでは行論の便宜上まず澤田先生による研究に即して簡単にまとめる。唐代仏教寺院の俗講を起源とする宝卷は、嘉慶一〇年（一八〇五）を一応の画期として、古宝卷時代と新宝卷時代とに大別される。古宝卷時代は、羅祖が正徳四年（一五〇九）に刊行した五部六冊以前の仏書に類する原初宝卷期、五部六冊とその影響を受けて刊行した「説理本意、一宗の經典としての宝卷」が盛行された一七世紀末から一八世紀初頭にかけての教派宝卷期、清の康熙三〇四年（一七〇〇年前後）から嘉慶初期にかけての清朝政府の邪教取り締まりと宗教活動の隠密化による宝卷の「沈衰期」に細分される。嘉慶一〇年を転機として民国に至るまでは新宝卷時代とする。中国側の代表的な研究者である車錫倫氏も澤田説の年代区分を参照して、各時代の宝卷の題材と特徴から、「沈衰期」のおよそ百年を民間（物語）宝卷期と見なし、清の康熙三〇四年を一つの区切りとして、その前期は早期仏教宝卷期と（五部六冊刊行後の）民間教派宝卷期、その後期は民間宝卷期と称する。⁽⁵⁾

本稿で取り上げる内容と深く関わるのは、教派宝卷の全盛期から嘉慶一〇年にかけての期間である。この期間は教派宝卷という性質から、宗教史や中国哲学の面で研究が進められているが、俗文学の面では、現存する作品の数量に乏しく、従来顧みられてこなかった。しかし、古宝卷と新宝卷の間に、宝卷がどのように継承され、かような質的な変化を生んだのか、という問題は宝卷の変遷を考えるうえで、看過できないものであろう。明清時期、中国の河北、山西、山東などの華北地域は宝卷の流布（宣卷活動）⁽⁶⁾する中心地域であったが、明末から嘉慶以前の物語宝卷は文献資料が少なく、車錫倫『中国宝卷総目』⁽⁸⁾でも僅か十数種の著録しかない。以下に現存するものをおよその時代順で掲

げる(巻名の後の数字は『中国宝巻総目』著録の通し番号。6、7、9は未著録。通し番号の後は教派によると判明されたもののみ記入しておく)。

明末

- 1 明刊折本『仏説如如老祖宝巻』〇二四三 無為教による
- 2 明刊折本『仏説如如居士度王文生天宝巻』〇二四四 無為教による
- 3 明末抄本『仏説王忠慶失散手巾宝巻』〇二五〇
- 4 明刊折本『銷釋孟姜忠烈貞節賢良宝巻』一三五五 黄天道(または弘陽教)による
- 5 『金瓶梅詞話』所見『黄氏女宝巻』〇二二八 教派による
- 6 『金瓶梅詞話』所見『五祖黄梅宝巻』 教派による

清の嘉慶以前

- 7 順治一七年(一六六〇)『続金瓶梅』所見『花燈轎蓮女成仏宝巻』
- 8 順治一八年(一六六一)抄本『仏説喜相逢宝巻』〇二五四
- 9 康熙二年(一六六三)抄本『猛将宝巻』¹⁰⁾
- 10 康熙三七年(一六九八)張掖刊本『敕封平天仙姑宝巻』〇一一〇 虚皇道
- 11 康熙刊折本『仏説張世登宝巻』〇二五六
- 12 康熙大盛堂刊折本『仏説趙孝郎還魂高氏行孝宝巻』〇二五七
- 13 康熙榮盛堂刊折本『仏説貞烈賢孝孟姜女長城宝巻』〇二五八 形式同4

- 14 乾隆三九年（一七六四）『仏説王有道休妻宝卷』〇二五—
- 15 乾隆三八年（一七七三）古杭昭慶寺大字経房刊本『香山宝卷』一二九〇
- 16 乾隆三九年（一七七四）刊本『太華山紫金鎮両世修行劉香女宝卷』⁽¹¹⁾〇六四—二
- 17 乾隆五三年（一七八八）山西介休抄本『慈雲宝卷』〇〇八—二
- 18 乾隆五七年（一七九二）『李素貞還魂宝卷』〇五八—六
- 19 嘉慶六年（一八〇一）朱鎔照『孟姜女長城宝卷』〇七一—⁽¹²⁾

9、14、15、18と19は江蘇、浙江地域で流布するいわゆる江南地域の宝卷であり、10は虚皇道による河西回廊地域の宝卷である。それ以外の一三種はいずれも河南、山西、山東を中心としたいわゆる中原地域の北方宝卷である。これら北方宝卷の中に、明末の6種と清初の8は宗教教派による、または教派色が濃く残っているものと認められるが、その間に挟む7『続金瓶梅』所見『花燈輻蓮女成仏宝卷』およびその宣卷形式がそれらと異なる特徴が見られ、興味深い存在である。原初の仏教宝卷、明末清初の宗教教派宝卷と長江流域に流布するいわゆる江南宝卷における形式上の特徴は澤田瑞穂先生や車錫倫先生による論述があり、また尚麗新氏は先行研究を踏まえ、『北方民間宝卷研究』⁽¹³⁾で綿密な比較・考証が行われている。ここではこれらの先行研究によって、本稿に関わる明末清初の北方宝卷と江南地域の宝卷における形式上の特徴を簡単にまとめる。

明末から清の嘉慶以前まで、物語宝卷のスタイルは、教派宝卷はますます複雑化になっていき、教派でない民間の宝卷は簡略になっていくという変化の傾向が認められる。

明末清初の宗教教派による宝卷は、その宗教的儀式により、かなり複雑な形式が見られる。現存する物語宝卷にみ

える形式を次のように掲げる。

開卷 ① 諷経呪 ② 安壇 ③ 拈香贊 ④ 三宝 ⑤ 開経偈 ⑥ 綱要（教義主旨） ⑦ 開卷偈

本文 「品」または「分」で分ける。「品」ごとに、① 散文（説）② 七言（または五言）詩讚 ③ 唱 ④ 長短句の

韻文 ⑤ 七言（または五言）詩讚 ⑥ 俗曲、小曲

結卷 ① 「宝卷円満」と唱和 ② 結経発願文

主要な本文では、②の詩讚は①散文（説）の内容の繰り返しであり、⑤の詩讚もまた④の内容の繰り返しである。

このように物語を展開しながら、間に当時流行した俗曲を歌ったり、唱和したりするスタイルをとる。例えば、前掲2無為教による『仏説如居士度王文生天宝卷』の本文は「品」で段落分け、「品」ごとに題名がある。⑥、①、②、③、④、⑤の形式を取っている。3 明末抄本『仏説王忠慶失散手巾宝卷』と4 明刊折本『銷釋孟姜忠烈貞節賢良宝卷』もほぼ同様の特徴が見られる。5 『金瓶梅詞話』所見『黄氏女宝卷』は閨房で行われるためか、儀式がやや簡略して、開経に④、⑤、⑦、本文に①、②、③、⑥の形式が見られる。6 『金瓶梅詞話』所見『五祖黄梅宝卷』は小説では部分的な内容であるため開経と結経は省かれるが、本文に⑥、①、②、③、④、⑤が見られる。

明末清初の宗教教派宝卷以外の宝卷、すなわち因果応報を説く民間の物語宝卷は、その変化過程を文献中に直接記述した例は少ない。ただ現在見ることでできる康熙・乾隆年間の写本から、およそのスタイルを推定することができる。例えば、前掲9『猛将宝卷』、18『李素真還魂宝卷』などがある。数少ないテキストではあるが、そのスタイルの特徴は早期の仏教宝卷のスタイルを取りつつも、それより簡略化になっていることが確認できる。例えば、前掲15『香山宝卷』は、本文の冒頭に十数行の説（セリフ）に続き、七言四句と五言四句の韻文が交互に置かれている。これは早期の仏教宝卷のスタイルの影響である。ただ、その続きの本文は散文（セリフ）と詩讚体韻文（讚十字、俗

曲など)のみで、開巻と結巻はないという簡単な構成である。16『太華山紫金鎮両世修行劉香女宝巻』の現存するテキストも、開巻と結巻がなく、ほぼ同様なスタイルである。15と16は江南地域の宝巻であることは周知のごときである。要するに、現存する清初の江南地域の宝巻は、明末の中原地域で大流行した宗教教派による影響がほとんど見られなく、より娯楽化、単純化したという地域的特徴があると認められる。以上、明末清初における宝巻の形式の地域的特徴をみてきた。

なお、本稿で取り上げる7『続金瓶梅』所収『花燈轎蓮女成仏宝巻』も宗教教派によるものではなく、この時期の民間宝巻の一種であるが、詳細な形式は後述する。

二 『続金瓶梅』に見える宣巻の形式

明末から清の嘉慶までの間に、現存する物語宝巻のテキストが乏しいことは、確かであるが、しかしその後では、テキストを作り出していくような、実際の物語創作と宣巻活動は盛んに行われていたことが、明清時期の通俗長編白話小説や戯曲資料から確認できる。¹⁵⁾『続金瓶梅』にも宣巻する場面がみられる。ここでは『花燈轎蓮女成仏宝巻』の文芸スタイルを、前述した同時期の宝巻の形式と比較しながらみていきたい。それに先立ち、まず『続金瓶梅』の成書年代と作品の趣向を簡単に確認しておきたい。

『続金瓶梅』六四回は、明の万曆(一五七三～一六一九)半ば頃に成立したとされる『金瓶梅詞話』の続書の一つである。¹⁶⁾作者の丁耀亢(一五九九～一六六九)は、山東諸城の人で、字は西生。野鶴、紫陽道人などと号する。多才多作だが、明末清初に生きた多くの文人と同じく不遇で波乱な一生を送った。¹⁷⁾『続金瓶梅』は清初の順治一七(一六六〇)年に完成したが、¹⁸⁾三年後に「淫書」「反清」とみなされ、清朝政府に禁書とされる。丁耀亢も一二〇日間投獄

された。⁽¹⁹⁾

『金瓶梅詞話』の最終回(第百回)は、北宋末、金軍が山東省清河県に迫り、宋金戦乱の中で西門慶の正妻である呉月娘とその息子が一〇日間避難し、また一方では、亡くなった西門慶・潘金蓮・陳經濟・李瓶児・花子虚・春梅らは済度され托生する場面で締めくくられる。『続金瓶梅』は、この避難の場面から始まる。宋金戦乱の中で母子は離ればなれになり、再会するまで一〇年を要した。その一〇年の間、親子が互いを探し求めるという基本設定の中に、生まれ変わった西門慶、及びその周辺人物である潘金蓮、李瓶児、春梅らが前世の罪業に応じたそれぞれの因果応報譚が挿入される。その中に、ア呉月娘と息子孝哥の離合譚、イ李瓶児(李銀瓶)と花子虚(鄭玉卿)の応報譚、ウ潘金蓮(黎金桂)と春梅(孔梅玉)の応報譚、という三つの大きなストーリーが内包されている(カッコの人名は本書で転生した人物)。小説の中にバラバラになっている登場人物の各々の因果応報譚が、『太上感應篇』の説く「因果正論」を主旨として、毎回の冒頭に引いて展開し、最後にもまた「因果正論」を述べて締めくくりとする。「因果正論」はいわば、つなぎのように各々の因果応報譚を繋ぎ合わせて長編になるという構成になっている。

本稿と関わりのある『続金瓶梅』第三八回「大覚寺淫女參禪 蓮華経尼僧宣卷」に、全文にわたり、「花燈驕蓮女成仏公案」を宣卷する状況とその内容が書かれている。第三八回は、上記三つのストーリーの中、ウ潘金蓮(黎金桂)と春梅(孔梅玉)の応報譚にかかる部分である。ウの粗筋と登場人物を簡単に紹介しておこう。潘金蓮と春梅は、それぞれ黎家と孔家の娘として転生し、名前は黎金桂、孔梅玉という。母親同士が友達であるため、二人は姉妹のように親しく、密かに同性愛の関係をも持っている。のち、金桂が性的に不能な劉癩子(陳敬濟の転生)と結婚し満たされない日々を送る。ついには男ほしきで子宮に異変が起こって病気になるてしまい、淫乱のたちであるにも関わらず、性生活のできない体になってしまう。彼女は、こうして苦しんだ末に出家する。一方、梅玉は金国の元帥の

息子に騙されて妾とされるが、凶暴な正妻（孫雪嬢の生まれ変わり）に虐げられて苦しむ。ある日、夢の中で前世における正妻との因縁を知り、現世の苦しみは前世の業によるものだと悟って出家する。

次に宣卷の形式をみておこう。第三八回「大覚寺淫女参禅 蓮華経尼僧宣卷」の冒頭に開卷の儀式が書かれている。説法、修行を勧め、開経偈、参禅、諸仏名を称え、開卷偈を誦える。ついで本文に入る。本文は「品」で分け、説（せりふ）と唱（うた）を交互に用いて展開する。前述した当時の北方宝卷によく見られる詩賛や俗曲はない。また結経の儀式もない。

『続金瓶梅』は丁耀元の晩年による作品で、山東で成立し刊行されたことから、『花燈輦蓮女成仏宝卷』は、当時山東でよく知られた宣卷形式によって書いたと考えてもよからう。ただ、注意されたいのは、この宝卷には次のような三つの特徴が見られる。

その一、宣卷する場所は尼寺であること。明清時代の宣卷が行われる場としては、閨房または尼寺がよく知られている。これは『金瓶梅詞話』や『醒世恒言』、『紅樓夢』など、多くの明清白話小説の描写からもみることができる。また当時の地方志や筆記小説で、女性が尼寺に集まって宣卷を聞くことをいかがわしい風習として批判する記述も少なくない。それらの記述から、宗教教派の厳粛な宣卷活動や、女性信者が功德を積むという宗教色の強い活動の場合、寺院に向かうことが多い。この場合、前述したような複雑なスタイルをとる。対して、信仰のみならず、女性の鬱憤晴らしや娯楽の目的にもなっている場合は、尼僧を招いて閨房で宣卷することが多い傾向がみとれる。例えば『金瓶梅詞話』にみえる『黄氏女宝卷』『五祖黄梅宝卷』の宣卷。閨房での宣卷スタイルは寺院（尼寺など）のそれより簡略化される。『続金瓶梅』は前述した趣向からも分かるように、仏教説話を用いて「因果正論」を説くという主旨に基づいて展開している。『金瓶梅詞話』にみえる宣卷と、宣卷人が尼僧である点は同様であるが、宣卷する場所

はその閨房とは異なり、尼寺に設定したのがむしろ合理的であり、当時の実状の反映であろう。

その二、冒頭に開経の儀式に参禅があること。前掲した明末清初の一九種の宝卷のみならず、現存する宝卷文学のテキストに、参禅することは『花燈轎蓮女成仏宝卷』のみであり、ほかに見出せない。この点については、後述する内容と合わせて考えてみたい。

その三、本文に詩贊や小曲、俗曲がなく、説と唱のみからなる。特に注目されたのは、説と唱が内容の重複関係ではないことである。一例として以下に引こう。⁽²⁰⁾

当下張善人夫妻二人、不消一年、学的蓮華經十分爛熟、如水流相似。一住三年、捧茶捧水、全没一点慢意。婆婆一日看着王氏道：「我今打攪你夫婦三年、經已念熟。今晚要辞你還家。」王氏便説：「媽媽。你今傳經三載、我夫妻受其大恩、不曾報効。原説替你養老送終、因何捨我便去。你家今在何処、甚麼地名？我夫妻好送你回去、時時看望你。」婆婆便道：「張善人夫妻近前来、聽我細説。」

擊磬一声、又念…

張善人你夫妻休要掛牽、我本来無定住身在空門。

要回去那里定東西南北、説声去就要走不論行程。

南無阿弥陀仏

無始来誰是我家鄉住坐、撒手去誰是我着急親人。

一行説取水来渾身沐浴、盤着膝打着坐合掌帰陰。

南無阿弥陀仏

右で確認した通り、明末清初の北方宝巻におけるスタイルは、七言または五言の詩讚がその直前の散文（説）の内容の繰り返しなので一般的である。『続金瓶梅』は清初の山東で成立したが、しかしその中で見える『花燈轎蓮女成仏宝巻』の全体的スタイルはむしろ、当時の江南地域の宝巻に見られるような簡略なスタイルになっている。

ここまで『花燈轎蓮女成仏宝巻』のスタイルを、同時代の宝巻の特徴と照らし合わせて考察してきた。『花燈轎蓮女成仏宝巻』の存在は、順治年間以前に因果を説く仏教説話の宝巻は形式において、すでに早期の仏教宝巻よりかなり簡単化したことを示唆する。清初の教派宝巻の中心地とされる中原地域では類例を見ないスタイルを見せている。同時期の江南地域における物語化、娯楽化した仏教宝巻と類似する形式が見られるのが興味深い。作者丁耀亢は山東の人であるが、江南を遊歴したことから、明末清初の江南で流行した宣巻の形式を取り入れて書いた可能性も否めない。または江南地域で見聞きした同話の宝巻が当時存在していたかもしれない。次にこの話の系譜をみていこう。

三 「蓮女成仏」の系譜

『続金瓶梅』に見える『花燈轎蓮女成仏宝巻』は、よく知られている「蓮女成仏」という仏教説話を説く宣巻である。宋元時代とされる清平山堂話本の一つ『雨窓集』に所収する「花燈轎蓮女成仏記」²¹の内容と、ほとんど同様である。その粗筋は次のようなものである。

花屋を営む信心家の張元善夫婦は子どもがいらない。ある日、法華経（『妙法蓮華経』）を唱えてきた盲目の老婆を家に引取って母親のように孝養をつくした。三年後、老婆は張家で坐化した。張氏夫妻はこの陰徳により、妻が懐妊し

て一女を生み、蓮女れんによと名づけた。異常に聡明な蓮女は実は老婆の転生である。七歳の幼さですでに仏経を誦誦できる。蓮女は能仁寺の恵光禪師について仏法を学ぶ。恵光禪師にしばしば、龍女が八歳で成仏できたが、私はどうすれば成仏できるかと尋ねる。一六歳になって、ようやく「まず男を探せ（且去尋個漢子）」という恵光禪師の答えを悟る。一八歳、李家の若旦那にみそめられて妻に請われる。しかし轎に乗った花嫁の蓮女は、李家に着いたときにはすでに轎の中で端然として坐化していた。

蓮女がしばしば言及する「龍女が八歳で成仏する」とは、『妙法蓮華經』卷四「五百弟子受記品第八」にみられる「龍女成仏」説話であることは、周知のごときである。八歳の龍女は『妙法蓮華經』を熟記し、成仏して男に変わる（変成男子）⁽²²⁾ という点が興味深い。当該箇所を引いておく。

文殊師利言…有娑竭羅龍王女、年始八歳、智慧利根、善知衆生諸根行業、得陀羅尼。諸仏所説、甚深秘藏、悉能受持、深入禪定、了達諸法。（中略）時舍利弗語龍女言…汝謂不久得無上道、是事難信。所以者何？女身垢穢、非是法器。云何能得無上菩提？ 仏道懸曠、経無量劫。勤苦積行、具修諸度、然後乃成。又女人身猶有五障、一者不得作梵天王、二者帝釋、三者魔王、四者轉輪聖王、五者仏身。云何女身速得成仏？ 爾時龍女有一宝珠、價值三千大千世界。持以上仏、仏即受之。龍女謂智積菩薩尊者舍利弗言…我献宝珠、世尊納受、是事疾不？ 答言…甚疾。女言…以汝神力、觀我成仏、復速於此。當時衆会皆見龍女忽然之間變成男子、具菩薩行、即往南方無垢世界、坐宝蓮華、成等正覺。

「女人成仏」「変成男子」の仏教説話は、ほかに『月上女経』にあるような、かぐや姫型の説話があり、また陝西

で流伝する魚藍觀音説話系統の馬郎婦めらうぶの話にも類似するモチーフが見られる。蓮女のこの話がこれらの説話から脱化したものかどうかは断定できないが、根本思想は共通するとみて差し支えなからう。

宣卷の本文は、普門品から始めて金剛經に進み、最後に法華經を課する話だが、これはいうまでもなく法華經を経典の王とする思想から来たものだと考えられる。『高僧伝』にも、誦經の一科がたてられているように、經典誦誦の功德は早くから力説されてきたもので、とくに僧尼の資格試験では誦經の量が規準とされていた。この話では盲目の老婆が長篇の法華經を暗誦することができ、蓮女も七歳の幼さで法華經を誦誦できると、しばしば強調されたのは、いかにも仏教説話らしい着想である。

「蓮女成仏」（女人成仏）説話の系譜には、花嫁が嫁に入る轎の中に坐化する、または美女の屍骸がたちまちに腐爛したというのはイヤな趣向だが、これもいわゆる女性の不浄觀から来たもので、愛慾断滅の禪法として説かれたものにちがいない。女性の不浄觀は右に引いた『妙法蓮華經』をはじめ、古い仏典に多く見られる。たとえば『大莊嚴經論』卷四に「法師淫女を化して骸骨と作し衆人を化する縁」という標題のような話がある。⁽²⁴⁾

ただ『花燈輪蓮女成仏宝卷』では、蓮女は龍女のように即時に男に変身（「変成男子」）して成仏したのではない。次のような禪師との問答をみておこう。

蓮女又問道：「照見幾個？」長老答曰：「照見一個、半個。」蓮女同曰：「一個是誰？」半個是誰？」長老道：「一個是我、半個是你。」蓮女曰：「借吾師法座來、與你講法。」長者曰：「且去尋個漢子來還債。」道罷、蓮女通紅了臉。

蓮女は七歳から成仏したくなり、しばしば恵光禪師にどうすれば成仏できるかを伺う。恵光禪師は「あなたはまた

半分の人間にすぎない（半個是你）、「まず男を探して債を還せ（且去尋個漢子還債）」と答えたのである。やや不可解な禅問答であるが、これは俗世でいる女は一人前の人間にはならないため、龍女のように即時に男に変身して成仏することができないのだという。そのため、まず男と結ばれて初めて一人前の人間と成り得て成仏できると説くのであろう。

これは蓮華色女（蓮華色比丘尼、サンスクリット語：Upalavarna）の仏教説話とも関連すると思われる。「蓮華色女」説話は『雜阿含經』卷四五や『阿羅漢具徳經』など多くの仏教經典に見える。また『大唐西域記』卷四にも類話がある。

蓮華色女はウツジャーニー（優禅那邑、憂禅とも書く）国の人に嫁して一女を産んだが、夫が密かに母親と通じるのを知る。生んだ娘が八歳の時に、一人家出した。彼女は疲れ果てて波羅奈（バラナシー）国に至り、ちょうど妻を亡くした長者と出会い、その妻となった。その八年後、長者がウツジャーニーへ赴き、若い女を妾とし連れ戻す。彼女はこの少女を愛し、少女も彼女を母のように慕い、共に仲良く暮らしていた。しかし後に彼女の素性を聞くと、それが以前残してきた実の娘である事を知り、自ら自責の念にかられ、またもや母娘で夫を共にした因縁を悲しみ、再び長者の家を出た。長者の家を出てヴェーサリー（毘舍離）国城に奔り、淫女の群れに身を投じてその筆頭になった。後に王舎城に移り、目連の教化を受け、摩訶波闍波提に就いて出家し比丘尼となったと伝えられる。

ここまで、「蓮女成仏」と関連して、「龍女成仏」説話と蓮華色女説話をみてきた。第三八回「大覚寺淫女參禅 蓮華経尼僧宣卷」という題名と合わせて考えると、「因果正論」を主旨としながら、『続金瓶梅』は『妙法蓮華経』に見える「龍女成仏」説話を素材として宣卷するのではなく、「花燈轎蓮女成仏」物語にした所以も理解できよう。蓮華色女は、前世における男との因縁を知り、現世の苦しみは前世の業によるものだと悟って出家する。『花燈轎蓮女成

『仏宝卷』でいう「男を探して債を還せ（且去尋個漢子還債）」も同様の趣意であると理解してもよからう。

四 仏教説話から話本、話本から宝巻へ

ところで、最後に蓮女が李家の若旦那に婚姻を許し、嫁入ったとたんに、花嫁が乗る轎の中で急死して坐化していったとはどういう意味であろうか。宝巻の常套からすれば、残された男も発心して念仏修行するか出家するかさせるところだが、『花燈轎蓮女成仏宝巻』は、その辺は端折ってしまった感じが否めない。前述した魚籃観音（馬郎婦）説話でも、馬氏の子が後にどうしたとも語っておらず、ただ一般に陝西の風俗が改まったと説いているだけである。これは人間の運命よりも仏教の説教が目的だからであろう。興味深いのは、物語宝巻とりわけ江南地域の宝巻に見られる登場人物は最後にほとんど得道して成仏することになっている。この点を考えると、『続金瓶梅』に見える『花燈轎蓮女成仏宝巻』は、いわば宝巻らしい宝巻を作ること念頭に置いたというよりも、前述したウ潘金蓮（黎金桂）と春梅（孔梅玉）の応報譚を説くという小説の趣意に主眼が置かれていると言えよう。換言すれば、『花燈轎蓮女成仏宝巻』は、当時すでに単独に成立し流布していた宝巻ではなく、『続金瓶梅』の作者丁耀亢が説経類の一種とされる話本物語「花燈轎蓮女成仏記」をそのまま引用し宝巻化した可能性が極めて大きい。

この点については、前述した『花燈轎蓮女成仏宝巻』の形式の特徴その二とその三も傍証となる。『花燈轎蓮女成仏宝巻』の開経の儀式に参禅があることがすでに前述した通りである。現存する宝巻文学のテキストに、参禅することとはまだ見出せない。話本「花燈轎蓮女成仏記」を小説の第三八回に移植し、宝巻という文芸スタイルにリライトする時、物語の趣意に合わせて、元の話本にあった形をそのまま取り入れたのであろう。話の筋も話本に忠実なままで、格別の改変は見えない。また、『続金瓶梅』は清初の山東で成立した小説であるが、『花燈轎蓮女成仏宝巻』の

タイトルは、当時の北方宝巻における一般的な形式とは異なる。この特徴も、当時その地域で成立し、民間で宣巻されていた単行の宝巻作品ではないことを示唆する。あるいは、丁耀元が江南地域を遊歴した際、当時見聞きした宝巻の簡略した形式を意識的に取り入れたのかもしれない。いずれにせよ、ここでは話本物語を宝巻化する具体例を窺うことができる。宝巻の変遷史において重要な意味があると考ええる。

五 おわりに

ここまで『続金瓶梅』に見える『花燈輻蓮女成仏宝巻』を一つのモデル作品として、その形式と内容について分析し、それを通して明末清初における宝巻の転換期の様相の一端をうかがってきた。あらためて結論を要約して示すとともに、残された課題を確認しておこう。

明末から清の嘉慶以前まで、物語宝巻のスタイルは、教派宝巻はますます複雑化になっていき、教派でない民間の宝巻は簡略になっていくという変化の傾向が認められる。『続金瓶梅』は清初の山東で成立したが、しかしその中に見える『花燈輻蓮女成仏宝巻』の全体的スタイルはむしろ、当時の江南地域の宝巻に見られるような簡略なスタイルになっている。

この宝巻の存在は、順治年間以前に因果を説く仏教説話の宝巻は形式において、すでに早期の仏教宝巻よりかなり簡略化したことを示唆する。

また物語の内容の分析から分かるように、『花燈輻蓮女成仏宝巻』は当時すでに成立し流布していた単行の宝巻ではなく、『続金瓶梅』の作者丁耀元が説経類の一種とされる話本物語「花燈輻蓮女成仏記」をそのまま引用し宝巻化した可能性が極めて大きいと思われる。

このように現存する早期テキストの数量に乏しい中、『花燈轎蓮女成仏宝卷』は体裁・内容などの文学面においても、宝卷史そのものの研究においても、恰好な一例となると言えよう。

注

- (1) 宝卷は、成立時期や思想、形態、題材などによりいろいろと分類が可能であるが、筆者は通俗文学と関わりの深い物語宝卷を研究対象としており、本稿でいう「宝卷」も主にこれを指す。
- (2) 『続金瓶梅』に関しては、その作者丁耀亢に関する研究が盛んになることにつれ、一九九〇年前後に特に注目された。以来、版本の研究、創作時期の考証、作者、思想、主旨など多岐にわたって多く論じられてきた。例として、孫言誠『続金瓶梅』的刻本、抄本和改写本』（『金瓶梅芸術世界』所収、吉林大学出版社、一九九一年）、石玲「金瓶梅の作期及其他」（同上所収）、羅徳榮『続金瓶梅』主旨索解』（李增坡主編『丁耀亢研究—海峽兩岸丁耀亢學術研討會論文集』所収、中州古籍出版社、一九九八年）などが挙げられる。なお、張兵「丁耀亢研究的回顧与思考」（『中国文学研究』、一九九七年第四期所収）に『続金瓶梅』の研究史を簡単にまとめている。
- (3) 例えば、陸永峰・車錫倫『靖江宝卷研究』（社会科学文献出版社、二〇〇八年）、尚麗新・車錫倫『北方民間宝卷研究』（商務印書館、二〇一五年）などが挙げられる。
- (4) 澤田瑞穂『増補 宝卷の研究』第三章「宝卷の変遷」第三七頁（国書刊行会、一九七五年）参照。
- (5) 車錫倫『中国宝卷研究』第一章「宝卷概論」第二頁、広西大学出版社、二〇〇九年。
- (6) 例えば、浅井紀『明清時代民間宗教結社の研究』（研文出版、一九九〇年）、馬西沙・韓秉方『中国民間宗教史』（上海出版社、一九九二年）などがある。
- (7) 明末清初の民間の宣卷活動については、拙稿「宝卷の流布と明清女性文化」（『中国古籍流通学の確立』、雄山閣、二〇〇七年）で論じたことがある。
- (8) 車錫倫編著『中国宝卷総目』、北京燕山出版社、二〇〇〇年。
- (9) 尚麗新・車錫倫『北方民間宝卷研究』第四九頁も合わせて参照、商務印書館、二〇一五年。

- (10) 車錫倫「江南民間信仰的劉猛將」で詳しい論考がある。『中国宝卷研究論集』所収、第一九九～二三三頁、学海出版社、一九九七年。
- (11) 吳方言宝卷。注5参照、第一二六頁。
- (12) 簡稱『尋夫卷』。朱鎔照原抄、□子法校訂(□は判読困難)「嘉慶六年(一八〇二)六月」という校訂者の記から、本書の改編抄写は嘉慶六年以前であることが分かる。宝卷の中には、部分的に吳方言を用いている。例えば、「未知意下若能(お考えはいかがでしょうか)」「好像晴天霹靂能(青天霹靂のようだ)」。本書について、車錫倫先生による論考がある。注5、第五八七～五八八頁。
- (13) 注8。
- (14) 注5参照、第一二九頁。
- (15) 通俗小説、戯曲資料にみる「宣卷」については、前掲注7拙稿を参照されたい。
- (16) 『金瓶梅』の続書は主に『玉嬌李』(佚書、一作玉嬌麗、万暦年間成立とされる)、『続金瓶梅』(即ち本稿で取り上げている作品)、『隔簾花影』(康熙年間成立とされる、撰者不詳)、『金屋夢』(夢筆生著、一九一五年)が挙げられるが、『隔簾花影』と『金屋夢』は『金瓶梅』の続書というより、『続金瓶梅』の改作本である。なお、四書の関係については、黄霖「金瓶梅続書三種・前叢」、春風文芸出版社、一九九一年)に詳しい論考がある。また、尾坂徳司訳『隔簾花影』(千代田書房、一九五〇年)の解説でも言及されている。
- (17) 張清吉著『丁耀九年譜』(南京大学出版社、一九九六年)を参照。
- (18) 『続金瓶梅』の成書年代は従来諸説がある。中国第一歴史檔案館編『歴史檔案』二〇〇〇年第二期に、順治年間丁耀九受審案の審判記録の資料が公開されている。その資料に丁耀九本人による次のような供述がある。「此『続金瓶梅』十三卷書、乃為小一人撰寫。小的于順治十七年獨自撰寫、並無他人」。この史料に拠れば『続金瓶梅』は順治十七年に成立したと判断できよう。ただこれについて疑問を呈する研究者もいる。歐陽建『続金瓶梅』的成書年代(『齊魯學刊』二〇〇四年第五期、第一一九～二二三頁)、劉洪強『続金瓶梅』成書年代新考(『東岳論叢』二〇〇八年第三期、第一〇五～一〇九頁)を参照されたい。
- (19) 丁耀九は投獄されたことについて、『帰山草・清室雜著八首』の冒頭「奇詩誌感」にこう述べる。「乙巳八月、以『続書』被逮、

待罪候旨。至季冬、蒙赦得放還山、共計一百二十日。獄司檀子文馨、燕京名士也。耳予名如故交、率諸史典各釀酒、三日一集、或至夜半、酣歌達旦、不知身在籠中也。各索詩紀事、予眼昏作粗筆、各分去。寄詩誌感。」丁耀亢撰、李增坡主編、張清吉點校『丁耀亢全集』上冊、第四七二～四七三頁、中州古籍出版社、一九九九年。

(20) 前掲注19『丁耀亢全集』中冊、第二九三頁。

(21) 胡士瑩先生は「花燈轎蓮女成仏記」に見える呼称と慣用語、民俗などの角度から考察を行い、これを宋代の話本（本篇為宋人話本）と判定した。『話本小说概論』上冊、第一二六頁、中華書局、一九八〇年。

(22) 『大正新修大藏經』第九冊第三三頁、新文豊出版社、一九八三年。

(23) 澤田瑞穂「魚籃觀音」その説話と文芸」を参照。『仏教と中国文学』所収、第一四三～一六三頁、国書刊行会、一九七五年。

(24) その内容はこうである。「時に彼の法師すなはち神通をもって、この淫女を度するに、膚肉墮落してただ白骨のみあり、五内諸藏ごとごとくみな露現す。」そこで衆人は「一切諸法は幻のごとく化人のごとく水聚沫のごとく金塗錢のごとし。ただ人を誑惑するのみ。さきには女人のあらゆる美色容止観ずべく、今はただ忽然として骨聚を見るのみ。儀容端正まさに諸の姿態をなすは、状疊道のごとし。かくのごときこと、今いづくにかある。」として不浄観を得、または出家勤修して阿羅漢果を得たとある。前掲注23参照。

* 本稿は二〇二二年度科学研究助成費（基盤研究C 課題番号：23K00345）による研究成果の一部である。